

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

|  |                    |                        |      |
|--|--------------------|------------------------|------|
| 博士の専攻分野の名称<br>(Major Field of Ph.D.)   | 博士 ( 文学 )<br>Ph.D. | 氏名<br>(Candidate Name) | 王 大宝 |
| 学位授与の要件  | 学位規則第4条第1項該当       |                        |      |
| 論文題目 (Title of Dissertation)<br>「蒲安臣使節団の研究—清朝最初の遣外使節団—」  |                    |                        |      |
| 論文審査担当者 (The Dissertation Committee)   |                    |                        |      |
| 主 査 (Name of the Committee Chair)  | 教授                 | 河西 英通                  |      |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member)   | 教授                 | 金子 肇                   |      |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member)   | 教授                 | 中山 富廣                  |      |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member)   | 准教授                | 中村 平                   |      |
| 審 査 委 員 (Name of the Committee Member)   | 総合科学研究科・教授         | 水羽 信男                  |      |
| 〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)   |                    |                        |      |
| <p>本論文は、アメリカ合衆国の駐清外交官（公使）だったAnson Burlingameアンソン・バーリングゲーム（中国名蒲安臣・蒲麟宸）が、なぜ清朝最初の遣外使節団の全権に選ばれたのか、蒲安臣使節団の考察を通して、中米外交関係を双方向から再構築し、使節団が19世紀の国際社会においていかなる意義を有していたかを検討したものである。</p> <p>本論文は序章、本論第一章～第四章、および終章の全6章から成る。</p> <p>序章は、中国人と外国人を混在させ、首脳陣に外国人を配置した清朝最初の遣外使節団の歴史的例外性に注目し、アメリカにおける中国近代史研究、中国における近代外交史研究を整理したうえで、新しい中国近代史・東アジア史を描くことの重要性を指摘している。</p> <p>第一章「蒲安臣使節団と欽差大臣制度」は、蒲安臣が就任した「弁理中外交渉事務使臣」という官職が、外交を担当する欽差大臣をベースにして作られた経緯を、欽差大臣制度が生まれた1838年から蒲安臣が中外交渉事務使臣に任命された1867年までを対象に、詳細に分析している。</p> <p>第二章「蒲安臣使節団派遣の背景」は、欽差大臣制度の展開のなか、アロー号事件の結果として1861年に設立された「総理各国事務衙門」を中心に清朝外交を考察し、蒲安臣使節団を必然化する外交政策Co-operative Policy（「協力政策」）の具体例とその思想的基盤を検討している。</p> <p>第三章「蒲安臣使節団の結成と機能」は、中英天津条約（1858年締結）の改正をめぐる総理衙門と各地の高級官職との間で行き来した諮問・回答を分析することで、遣外使節団の必要が浮上してきた背景を明らかにし、蒲安臣の在華活動をたどって、彼が使節団首脳に任命された経緯を跡付け、使節団それ自体の構成や権限などを論じている。</p> <p>第四章「アメリカにおける蒲安臣使節団の活動」は、最初の訪問先であるアメリカにおける使節団の活動を、①使節団が目当てにした在米中国人問題、②各地における蒲安臣の演説、③中米天津条約追加条約の調印、に焦点をあてて考察している。とくに②はアメリカの新聞報道を詳細に調査することで初めて明らかにされた。</p> <p>終章「アメリカ訪問以後の蒲安臣使節団」は、論文全体のまとめをし、蒲安臣使節団がアメリカでの活動を通して、より普遍的な文明観の下での異文化の融合性を強調し、相互理解を主張することで、西洋文明と対等な中国文明の存在を提示したと結んでいる。</p> <p>本論文は、従来、中国の近代化のイメージが、より早くより円滑に近代化をとげたとされる日本を有力なモデルとして、描かれていたことを批判し、その相対化の重要な契機として、蒲安臣使節団を19世紀国際社会のなかに位置付けようとしたものである。</p> <p>日本語の表現は粗削りで、問題箇所も少なくなく、論旨が混乱している部分も見られる。論文のス</p> |                    |                        |      |

タイトルとしても不備な点が多々あり、先行研究に対する批判にも甘さが残る。しかし、本論文は中国・アメリカの資料を駆使しながら、果敢に従来の使節団研究を乗り越えようとした意欲作であり、今後、さらに東アジア社会の近代化像の再構築に向かう可能性を秘めている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)